

日曜大殿説教

「いまわの時に」

平成二十三年八月十四日(日)午前九時 於大本山増上寺大殿

天然寺住職 後藤 尚孝

宗祖法然上人のおことば

建暦二年(一一二二)正月三日の午後八時ごろ、病床にある法然上人の傍らで見守っていた人々が、本当に往生されるのかどうかを尋ねたところ、上人は「極楽はもともと私がおりましたところですから、必ず極楽に帰り往くのです」とおっしゃいました。

(建暦二年正月)十一日の朝八時頃、(病床にあつた)法然上人は傍^{かたわ}らの弟子たちに次のようにお話しになりました。「声に出してしっかりとお念仏を称えなさい。阿弥陀さまの名号を称える者は、一人も漏れることなく往生するのです」。このように高声のお念仏をお勧めになり、その功德をさまざまに讃嘆^{さんたん}されると、観音・勢至をはじめとする菩薩方が上人の目の前にお出ましになりました。上人は「弟子達よ、拝し奉らないのか」とおっしゃいましたが、(弟子たちには見えないので)拝むことができない旨を申し述べると、お念仏を称えるよう重ねてお勧めになりました。

(病床にあつた法然上人は傍らかたわの弟子たちに次のようにおっしゃいました)「永年称えてきたお念仏の功德が積もり、ここ十数年来、極樂のありさまや阿弥陀仏・諸菩薩のお姿を間近に拝するのは常のことでした。けれども、これまではそれを黙っていました。今、最期を迎えたからこそそれを打ち明けるのです」。

(臨終が差し迫つた法然上人に)弟子たちが、阿弥陀仏像の手に結ばれている五色の糸を握るように勧めましたが、上人はそうなさいませんでした。上人は「こうしたことは、りんじょうぎぎょう(臨終行儀を望んだ方がこれまで)一般的になさつてきた作法です。私は必ずしもそのようなことをしなくてもいいのです」とおっしゃつて、ついにその糸を握られることはありませんでした。

(建暦二年正月)二十日の午前十時ごろ、弟子たちが上人に申し上げました。「この建物の上に、紫の雲が立ちのぼつてきました。御往生はいよいよお近いのでしょうか」。するとそれをお聞きになつた上人が、「ああ、何ともうれいことよ。(そうした奇瑞きずいがあらわれるのも)ひとえに私の往生が、すべての人々にお念仏の功德くふくを信じてもらうためなのです」とおっしゃいました。

(建曆二年正月)二十五日の正午ごろ、法然上人は長年所持されてきた慈覚大師(円仁)えんにんの九条のお袈裟をお着けになり、頭を北に、顔を西に向けて横になられました。弟子たちが、「たった今まで行儀正しく座ってお念仏をお称えになっていたのに、いよいよ臨終を迎えて横になるといふのはいかがされたのでしょうか」と申し上げると、上人は微笑みながらおっしゃいました。

「今、そのわけを話しましょう。そなたたち、よく尋ねてくれた。私しやほがこの身を娑婆に宿したのは、浄土往生のための道を説き明かすためでした。今、魂を極楽浄土へと帰すのは、往生する実際の手本を示すためなのです。もし私が座ったまま往生したならば、皆が必ずそれに学ぼうとするのではないでしょうか。もしそうであるなら、病の身を起すのは容易でないばかりか、おそらく往生を願う気持ちなどどこかへ行ってしまうでしょう。こうしたわけで、私は今、横になったのであつて、座れないわけではないのです。わが仏教の開祖、お釈迦さまも、やはり頭北面西で御入滅なされました。それもまた往生の手本とするためだったのです。どうして私がお釈迦様より優れた手本を示せましようか」。